



定例委員会報告

2003-01

フレンズ国際労働キャンプ

(FIWC)

関東委員会



フレンズ国際労働キャンプ (FIWC) 関東委員会
 定例委員会報告 2003年1月号
 2003年1月18日 目黒鍼療院にて
 参加者: 目黒美穂子、松長麻美、佐藤正明、原田僚太郎、鳥居厚志

もくじ

第2回 **中国ワークキャンプ** 開催 ++ 1
 リンホウの惨状 / 住宅建設は村人のためにならない?
 / 話が違ぞ?! / 緊急会議 / マーク、正月返上 / 最重要人物・マーク / 森元さんがキャンプに?!

韓国ワークキャンプ + + + + + 3

第3回 **バングラ会** 大成功! + + + 3

委員長 をやりたいです。 + + + + 4

『災い転じて福となす』 **中国駐在計画** + + 5

中国現地駐在員 カンパのお願い + + + 6

中国キャンプのための哲学 [西尾雄志] + 7
 2. ハンセン病問題におけるワークキャンプの定位

関東委員会会計より + + + + + + 8

次回の定例委員会 + + + + + + + 8

第2回中国ワークキャンプ開催

日程: 2003年2月20日〜3月12日

キャンプ地: 広東省潮州市潮安県古巷鎮

リンホウ村 (ハンセン病療養所)

ワーク内容: 集会所の建設

参加費: 11万円を予定 (往復航空券含む)

参加予定者: 阪井悠子・島倉陽子・西尾

雄志・原田僚太郎・藤澤真人・柁田香織・

森元美代治・吉田亮輔

定員: あと2名募集します

*

「西尾さん、原田さんね、私もね、中国
 キャンプ、行きますよー!」

森元美代治さんは、講演の予定がギツ
 シリ書き込まれたスケジュール帳を繰り
 ながら言う。

「うん、ちょうど講演の予定は入ってな
 い」。こうして、森元さんの中国キャンプへ
 の参加は決まった。飲み席のことだっ
 た。

森元さんはF.I.W.C. 関東委員会のOB
 で、国立ハンセン病療養所多磨全生園元
 自治会長、現アイデアリアルジャパンコー
 ディネーターだ。いつ休んでいるのだろ
 う、と不思議に思うほど数多くの講演を
 こなし、ハンセン病の正しい知識を全国
 に広めている。

キャンパーとしての森元さんと接する
 ことで、中国の学生やリンホウの人たち
 に引き起こされる変化が、今から楽しみ
 だ。

一方、肝心なキャンプの準備は、困難
 を極めた。「まったく問題なし」「きわめ
 て順調」と思われていた第2回中国キ
 ャンプのワーク内容の決定は、キャンプ開
 催も近い1月29日になされた。ワークキ
 ャンプ開催に何とか支障を来たさず済ん
 だのは、中国の学生・朱佳栄(マーク)
 の力に負うところが大きい。

まず、今回のキャンプに至るまでの過
 程を簡単に振り返ってみよう。

リンホウの惨状

F.I.W.C. 関東委員会は、ハンダの紹介に
 よってハンセン病療養所・リンホウ村で
 ワークキャンプを行なうことになった。

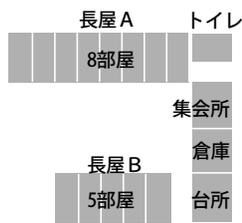
2002年9月、下見でリンホウを訪
 れた。シロアリの被害で家々は倒壊寸前
 広大な村の敷地に井戸は1つ、トイレも
 1つ。比較的自由が利く村人3
 名が、歩けない村人・手が不自由な村人
 の生活を支えている。

ここに集合住宅をつくる。この計画
 は3回のキャンプに分けて実行する。
 2002年11月にトイレを、2003年
 2月に倉庫・集会所・共同台所を、そし
 て8月に村人の個室7部屋(長屋B)を
 建設し、現在たっている8部屋(長屋A)
 と合わせ、村人13名全員が住める「コ」
 の字型の長屋を建てる。

住宅建設は村人のためにならない？

第1回中国ワークキャンプ（2002年11月）には、マークとジル（蔡潔珊）を中心とする中国の学生も参加し、無事トイレを完成させることができた。しかし、このキャンプで村人と生活を共にした結果、集合住宅の建設計画に対して不安を抱いた。というのも、この計画によって村人の生活は劇的に変化し、高齢で身体の不自由な村人が新しい生活環境に適応できない可能性があるからだ。

そこでマークとジルの協力のもと、建設計画の必要性に関するアンケートを、村人全員に対して行なった。その結果
 (1) 共同台所にはカマドを複数設置して村人の食生活を大きく変えないこと、
 (2) 長屋Bの村人の個室は5部屋で充分なこと、
 (3) その他の計画―集会所・倉庫・水道―に大きな変更はほしくないことが確認された。建設業者は、新しい設計図をハンダ経由でファックスし、その内容を知らせると約束した。この時点で、2月開催の第2回キャンプでは、共同台所・集会所・倉庫を建設することになった。



話が違つぞ!?

2003年1月22日、ハンダから6枚のファックスが入った。建設業者が作成した新しい建設計画書だ。一目見て、愕然とした。2002年11月のキャンプでのアンケートがまったく反映されていないのだ。第2回ワークキャンプに向けて準備が順調に進んでいると思っていた矢先のことだけに、あわてた。紆余曲折はじまりだ。

新しい設計図によると、11月のアンケートに基づいて決めた共同台所・倉庫・集会所を建設するはずの場所には、巨大な倉庫だけを建てることになっている。集会所と台所の建設はどうなっているのか。村人の個室5部屋（長屋B）は長屋Aの各部屋よりも大きく設計されており、そのうちの1室はさらに広くなっている。



緊急会議

1月24日、緊急にミーティングを開き第2回キャンプのワーク内容について話し合った。その結果、マークとヴィヴィ

アン（ハンダの職員）に次のことをメールで確認することになった。

- ① 新しい設計図に11月アンケートの結果が反映されていないのはなぜか。
- ② 長屋B（5部屋の個室）の真ん中の部屋が広めに設計されているのはなぜか。
- ③ 長屋Bの各部屋の広さを長屋Aと同じにしないなら、広い部屋を巡って村人の間にイザコザが起きるのではないか。
- ④ 巨大な倉庫1つをつくるのではなく、そこには集会所・倉庫・台所を建設するべきではないか。

このメールを読んだマークは26日、リンホウ村と建設業者を訪れ、翌27日にメールで建設業者からの情報を流してくれた。①11月アンケートの結果が反映されていない理由は、台所建設について村人の意見の調整がつかなかったこと、また建設予定地が狭いことにある。

- ② 集会所・長屋B（5部屋）の中央の部屋が広いのは、それを集会所と考えているためだ。
- ③ 台所：巨大な倉庫を建設する予定は変更し、そこには台所を建てる。（建設費2万円（約30万円））
- ④ 倉庫：倉庫は、近くの家を建て替えてつくる。（建設費2万7000円（約40万5000円））

マークからのこの情報を受けて1月27日、再度ミーティングをひらき、以下のことをマークとヴィヴィアンに伝え、村人・建設業者と話し合ってくれるように

お願いした。
 ① 長屋Bの中央の部屋は、集会所としては狭い。

- ② 長屋Bの1室を集会所にすると、村人13名のうち1名が入居できなくなる。（8室（長屋A）+5室（長屋B）=13室）
- ③ 長屋Bの中央に集会所を設けると、夜間のテレビの音がすぐ隣の部屋に響く。
- ④ 以上3点を考え合わせると、倉庫の建設予定地に集会所をつくるのが最善策だ。
- ⑤ 台所については、問題が複雑なので、2月キャンプのときに相談する。
- ⑥ 倉庫については、近くの家を建て替えずにそのまま使う。



マーク、正月返上

1月29日、このメールの内容についてハンダのヴィヴィアンは賛成してくれた。ただ彼女によると、現在マークは旧正月休み中で、村人や建設業者と話し合うのは難しいだろうという。

にも関わらず、マークは動いてくれた。29日の早朝、マークは次のようなメールを残し、リンホウを訪れた。

「きみたちの努力に心から感謝したい。本当に村人のことを考えてくれていてるね。建設業者と連絡とってみよう。できるだけ早く返信するから心配しないで。」

本当にありがとう。昨日、村で旧正月を祝ったんだけど、村人はきみたちとほんとに会いたがっていたよ。きみたちは天使みたいだった。」

天使はマークだ。29日の夜のうちに、マークは村人・建設業者との話し合いの結果をメールしてくれたのだ。建設業者も村人も、2月のキャンプで集会所を建設することについて賛成してくれたという。業者の見積りでは、集会所建設費用は2万3000円（約34万5000円）、建設期間は35日だ。2月キャンプのワークは、この集会所建設に決定した。

マークのこの素早い行動がなければ、ワーク内容の決定は大幅に遅れたことだろう。感動したヴィヴィアンは次のようなメールをマークに送った。

「村人、FIRC、ハンダへのあなたの助けに感謝します。すばやい行動に感謝しました。このプロジェクトとその計画段階にあなたが参加してくれたことでとても暖かい気持ちになりました。あなたの協力は大きな支えになる上に、とても勇気づけられます。これからも、困っている人々への暖かい支援の手を差し伸べていきましょう。」

もう一度お礼をいいます。ありがとう。そして、よいお年を！」

最重要人物・マーク

マークは変わった。
2002年11月、リンホウ村で初めてハンセン病快復者と出会ったマークは、とまどいを隠せなかった。そのマークが、今や、リンホウの人々と電話で連絡を保ち、旧正月を村とともに祝い、村人とF・W・Cとの間を取り持つっている。中国キャンプでの最重要人物に成長した。いずれは、中国のハンセン病問題において活躍してほしい。

リンホウでマークに会うのが楽しみだ。

森元美代治さんがキャンプに!?

「中国キャンプ、行きますよ」。

森元美代治さんのこの言葉を聞いてすぐに思い出したのは、イーセヨンさんだ。

イさんは韓国のハンセン病快復者で、2002年2月に行なわれた、ヤンカン村での中国キャンプ*に参加した。丁寧にお辞儀しながら、「アニーヨンハセヨ」と柔らかい声で言うのが印象的だ。イさんは、私のハンセン病快復者観を変えた。村人とのパーティーでは、歌って踊る陽気なおじいちゃんだった。ハンセン病啓発のために街頭でビラ配ったときは、道ゆく人たちに熱心に声をかけていた。イさんは、「ハンセン病快復者」というよりは、ひとりのキャンパーだった。

ヤンカンを去る日。イさんは、村人と抱き合って涙を流した。同じ病を病んだ

経験がヤンカンの人たちとの絆を強くしたのだろう。その姿に、あの西尾が涙したという。

今ところ中国の学生たちにとっては「ハンセン病快復者=貧しい人、困っている人」だ。ところが森元さんは、国連でスピーチし、スーツを着て講演をし、マスコミへの影響力を持っている。そして今回、キャンパーとしてワークキャンプに参加する。森元さんの存在は、中国の学生、そしてリンホウの人々自身の「ハンセン病観」を変えよう。

◎原田僚太郎

韓国キャンプ

韓国キャンプでは、ここところこういった活動はなく、勉強会も未定です。韓国語勉強会に関しては、学習リーダーの大山君が只今臨床実習のためそれ以降の開催、ハンセン病勉強会については中国キャンプとの共催を考えています。詳しい内容、日程などは未定です。2月中旬には、カウンターパートである韓国語大進校・ハナ会の2002年度リーダー、キムテユン君が来日するため、歓迎の「アユン会」を開催予定です。

◎松長麻美

第3回バングララ会大成功!

ベラ

(F・W・C関東・姉妹団体)

前回の定例会報告で告知した、新年1月11日に代々木オリンピックセンターで開催された「バングララ会」(バングララデッシュワークキャンプのOB会)が、見事大成功を収めることができました。昼の部・大トークバトル、バングララ写真展夜の部・飲み物や軽食を用意、歓談も交えながら、コント、自己紹介、キャンプ報告、活動報告など、バングララカルトQ参加者総勢・52名

大トークバトル (司会者: 色紫典)

大トークバトルでは、さまざまな国でワークキャンプを行っているキャンプ代表者が一同に集まり、「究極のワークキャンプとは何か」をテーマに語り合うというものです。今回は5つのキャンプからそれぞれの代表者が参加くださいました。

中国C: 原田僚太郎、韓国C: 佐藤正明、ネパールC: 宮本久美子、バングララC: 藤田準、フィリピンC: 藤沢真人

会場は、机を六角形に並べ、議論の混乱を避けるため基本的に話すのは各キャンプの代表者1名という形をとりました。話し合われた内容は、「リーダーをやること」のメリットデメリットや「ワークは本当に役に立っているのか」といったものでした。それぞれ思い思いのことを自由に述べる事ができたと思います。

トークバトルの最後には、ネパールキャ

ンプ代表の宮本久美子さんによる「異文化コミュニケーションゲーム」を総勢20名ほどで体験してみました。異文化にぶつかった場合どうしたらいいのか、またそのときにどういう態度をとるかという個人の違いもわかるというものでした。

表彰式では、ネパールキャンプに「ベストキャンプ賞」として賞状とトロフィーが授与され、最後は記念撮影をして和やかな雰囲気の中、幕を閉じました。このトークバトルによって、キャンプ間、また団体間の枠を越えた人間関係のつながりを深め、広げられたと思います。トークバトルの様子は、現在テープ起こし中です。出来次第バングララキャンプのホームページに掲載します。

バングララ写真展 (福原由理絵、小阿瀬直)

会場の一角をバングララデッシュの写真で埋め尽くしました。写真のセンスと技術に長けたキャンパーによって撮影された写真、壁に掲示したり机に並べたり、コンピュータの画面に次々と映し出される、という最先端な方法も取り入れた写真展でした。キャンプ参加者は、懐かしいバングララデッシュの写真や映像に、それぞれの思い出を心に再び思い描き楽しんでいました。また、この写真を機に、改めてバングララデッシュという団をとなえなおすこともできたでしょう。

お笑いコンビ「オアシス」のコント

(阿部静生、天野雄太)

夜の部の先陣を切ったのは、前回9月のキャンプ中に結成された世紀のお笑いコンビ、「オアシス」によるコントでした。始まる前から「オアシスマニア」とも言うべき熱狂的ファンたちがまだかまだか観客席の最前列を陣取り、登場を待ちきれない様子でした。そしてついには司会者鳥居厚志による紹介でオアシス登場。会場を爆笑の渦に巻き込みました。ゲストで来てくれた3歳のバングララデッシュの女の子にも大好評でした。

自己紹介、キャンプ報告、活動報告など

(鳥居厚志、高柳愛子)

同じバングララキャンプ参加者といっても別々のキャンプの参加ですとなかなか会う機会はありません。だからもっと別キャンプ参加者との交流の場を設けたい。そういう理由からこのバングララ会も企画されているのですが、やはりお互い知らない人同士が多いし、またゲストとして何名かのバングララデッシュ人の方やネパールキャンプ、フィリピンキャンプの方もいらしていましたので、一通り自己紹介をしました。中には突然ギターを出して歌いだしたり、アントニオ猪木の物まねを

する人まで出てきました。

自己紹介が済んだあと、前回キャンプリーダー、そして現在のバンングラキャンプの代表でもある高柳愛子さんから、挨拶を交えてキャンプや活動報告しました。

バンングラカルトQ

(鳥居厚志、高柳愛子、一色崇典)

昨年1月の第1回バンングラ会でも大好評だったクイズ大会、「バンングラカルトQ」が今回、豪華景品を取り揃えて帰ってきました。問題作成者が四苦八苦して考え出された難問奇問引っかけ問題あり。解答者はみな問題に耳を傾けるのに必死な様子でした。答えが発表されると同時に会場からは喜びの声やため息が漏れ、いよいよ問題の採点へ。高得点者から景品が手渡されました。1等の賞品は新宿伊勢丹食品売り場で買った豪華フルーツセット！ 2等は観葉植物セット！

ほかにもバンングラデシユ直輸入のタブラ(太鼓)や、かわいのお風呂マット、バンングラ東部の布など。おまけとして用意したブービー賞の中身は、バンングラキャンプで毎日食べていたタール豆でした！ そんなこんなで大盛り上がり。ああ、まだこの時間がずっと続いてくれたら、と名残惜しむ参加者の思いをよそに、バンングラカルトQ終了と同時にバンングラ会は幕を閉じたのでした。

終わりに

FWC定例委員会報告の誌面をお借りして、バンングラデシユワークキャンプに関する報告を長々とさせていただきました。ありがとうございます。おかげさまでバンングラ会は大成功を収めることができました。いらしてくださいましたFWCの方々、並びに他キャンプの方々、外国人の方々、ゲストの方々、どうもありがとうございました。お礼申し上げます。

◎ 鳥居厚志

委員長をやりたいです。

藤澤真人

西尾さんも委員長になって早2年、解体寸前だったFWC関東をこまごまとめあげてくれました。それまでやっていなかった定例会を復活させ、少人数での發送作業。会計やカンパをくれた方の礼状書き、一人で黙々とこなしてきました。そんな西尾さんも4月からは就職も決まり社会人となります。そこでそろそろ委員長を交代する時期ではないかと思ひ私、藤澤真人が次の委員長に立候補いたします。

ただ委員長をやるではつまらないので、何か目標を持ってやりたいと思います。

今関東FWCでは韓国キャンプ、フィリピンキャンプ、中国キャンプ3カ国でキャンプをしています。キャンプ同士の交流がなかなか無く少しさびしい状態が続いています。

せっかく同じ団体でワークキャンプをしているのにそれでは勿体無いと思います。みんなで何かして横とのつながりを広げる。これを自分が委員長になったときの目標にしようかと考えています。

まだまだ頼りない委員長だと思いますが、現役、OBのキャンパーの皆さん暖かい目で見守ってください。

同時に会計をやってくれる方を募集しています。

◎ 藤澤真人



まもなく関東委員会の委員長が交代します。藤澤真人氏を応援しますか？

OK

『災い転じて福となす』中国駐在計画

原田僚太郎

F I W C 関東委員会・中国駐在員（2003年4月）

中華人民共和国広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村（ハンセン病療養所）
2003年4月

2002年5月、某新聞社面接、撃沈。

2002年9月、某大学大学院政入学試験、撃沈。

世の中に冷たくされて、独りぼっちで泣いた夜。もうダメだと思いかけたところのことだ。

2002年11月、リンホウの人々を好きになった。有効な治療法がない時代にハンセン病を病んだ彼らは、外面が崩れている。しかし、内面を磨き上げた。ハンセン病ゆえの隔離を生きた彼らは、高齢で後遺症が重い。しかし、死と向き合っていて生きている。

かつての隔離状態がつづく、ハンセン病療養所・リンホウ村。中国や日本の学生をたくさん呼んで、リンホウでワークキャンプがしたい。リンホウの人たちが家族に会えるような雰囲気、中国にくっついていきたい。村でいちばん若い郭さん（48）を看取るまで、リンホウに関わりたい。

広東省潮州市潮安県古巷鎮、リンホウ

村。ここに、F I W C の駐在員兼ハンダ*の「ただ働き職員」として1年間（あるいはそれ以上）滞在する。

2003年度活動計画

① ワークキャンプの準備・評価

F I W C 関東委員会主催の中国ワークキャンプが8月に行なわれる。その準備として、ワーク内容・建設費用・建設期間などの必要な情報を集め、キャンプのスムーズな運営を目指す。

また、ワークキャンプでの建設が本当に村人の役に立っているかを、ワークキャンプ後に確認する。ワークによって村に新たな問題が起こるかもしれないからだ。

② 中国側キャンパーの募集

ハンセン病快復者といっしょに寝泊りするキャンプに、エリートである中国の学生が参加したとあれば、それがもたらす啓発効果は測り知れない。しかし中国の学生は勉学に忙しく、キャンプに参加する時間を十分に取ることができない。

そこで、学生以外の人々にもキャンプ参加を呼びかける。特に子供たちをキャンプに巻き込みたい。女は男を動かす。

子供はその女をも動かす。

③ ハンセン病専門医による診察の準備

日本国内の国立ハンセン病療養所に所属するハンセン病専門医が、リンホウを訪れて村人を診察する計画がある。私は医学的な専門知識はないが、村人が服用している薬の名前やリンホウ医院内の



治療設備の有無について下調べをし、先生に事前に情報を伝える。

④ 他のボランティアグループとの連携

F I W C 以外の日本のボランティア団体に中国のハンセン病問題を伝え、活動の橋渡しをするとともに、側面からのサポートを行う。現時点で中国のハンセン病問題に興味を示す機関が見つかってい

るので、当面はそのサポートを行う。

⑤ リンホウの生活支援

リンホウの村人13名のうち、未舗装の山道を自転車で行くこと20分の市場まで比較的自由に買い物に行ける人は、2名しかない。ふたりは、身体の不自由な村人のために他にも様々な仕事をこなすが、彼ら自身もまた高齢だ。リンホウの人々の力になりたい。

⑥ ハンダのニュースレター『漢達通訊』の翻訳

中国のハンセン病支援NGO・ハンダのニュースレター『漢達通訊』を翻訳し、モグネット(<http://www.mognet.org>)に掲載する。ハンダの活動は、日本においてまだよく知られていない。日本語で『漢達通訊』を読むことができれば、ハンダの活動への理解が深まり、F I W C との連携も強化されるだろう。

⑦ リンホウについてのルポルタージュ

知らなければ、行動は起こせない。中国でのハンセン病差別の実態。快復者の棄民的生活。村人の生涯の聴き書き。キャンプに関わった日中の学生の変化。これらをルポにまとめ、多くの人々に知らせていきたい。そのうちのたったひとつ

りだけでも、その人の心を動かせるような文章を書きたい。

予定では短いルポを毎日かき、モグネットに掲載する。また、F I W C 関東委員会の定例会報告にも記事を出したい。さらに、早稲田大学のボランティアセンターの「ボランティアレポーター」としてもルポを書く予定だ。1年間の滞在の記録は、1冊の本にまとめる。

⑧ 中国企業訪問

経済成長をつづける中国の企業を訪問し、ワークキャンプへの資金援助を求め、社会から疎外されたリンホウでのキャンプに、中国の学生だけでなく、中国企業も参加すれば、このハンセン病半隔離村が社会に開かれていくキッカケとなるだろう。

その他にも、リンホウでの様々な活動が計画される可能性がある。それらに備え、中国駐在員として、いつでも、どんな企画でも受け入れることができる態勢を整えておきたい。

そのためには、何よりも中国語、いや、潮州語の習得が先決だ。

◎ 原田僚太郎

中国駐在員カンパのお願い 西尾雄志

「俺たちは、カラのペットボトルだ!!」
社会のヤクタタズだ!! ユニクロのフ
リースにでもなつて社会の役に立つてや
ろっぜー!!」

高田馬場の焼き鳥屋で、1本70円の焼
き鳥を食べながら、酔いに任せて私は叫
んだ。

「そつだそつだ」

FWC関東委員会の広報部長のピロ
(中村博志)が続けて叫んだ。

就職活動がうまくいってなかつた原田
僚太郎は、わたしたち二人を無言で見つ
めていた。

敗北感と劣等感。

それが私たちの間で、必要以上にしよっ
ぱい焼き鳥を中心に、とろろのように、
うずまいていた。

数週間前私は、学会発表で学者連中に、
さらし者のようにバカにされていた。

ピロはずっといろんなことがうまく
いってなかつた。

僚太郎は就職試験にことごとく落ちて
いた。

ダメ人間3人が、馬場に集つた。

「このヤロー、さんざんバカにしやがっ
て、いつか見てろやー!」

人からの評価を受けられないもどかし
さと悔しさを、酒と焼き鳥にぶつけてい
た3人の、途方もないエネルギーが満ち
溢れていた。

「人から相手にされない悔しさをもつ者
は、幸いである。それは、途方もないエ
ネルギーに変わる。ためえらいつか見て
ろよ!」

いい活動をしたい。意味あることをし
たい。そしてバカにした連中を見返して
やりたい。

そんなことを考えていた。

そんなことを考える私たちに思いつく
こと。

ワークキャンプ。

いいワークキャンプをしたい。

意味あるキャンプを成功させたい。

それを通して自分の存在意味を確認し
たい。

そんな思いに満ち溢れていた。

そんな思いをぶつけるべく、中国キャ
ンプは旗揚げされた。

その後結局、僚太郎は就職先が決まら
なかつた。

トドメにスベリトドメに考えていた大学
院の試験にも落ちた。

彼のエネルギーは、おそらく最高潮に
達したのだと思つた。

そんな彼が言い出した。

「中国のハンセン病療養所、リンホウ村の
現地駐在員になりたい」

おそらく今彼がリンホウ村でやろうと
していることは、中国のハンセン病の歴
史の1ページを刻む重大なことだ。

いやそれだけではない。

経済成長路線をまっしぐらにひた走る
中国で、決して忘れてはならないココロ
を中国の人たちに伝える、重たいミッショ
ンだ。

そのココロとは、社会が無視したハン
セン病の問題であると同時に、ワークキャ
ンプの精神だ。

彼は数十年後、おそらく日本にとつて、
中国にとつて、アジアにとつて、そして
世界に対して、大切な仕事をした人物と
して評価されるだろう。

無視してはいけない問題を、一切の金
銭的報酬を求めず、社会的な地位を求め
ず、ささやかな志のみをもって、取り組
んだ人物として、評価されよう。

ワークキャンプは、人間再生工場であ
る。

普段の生活では役に立たないゴミを、
役に立つように加工する工場である。

普段の生活では役に立たないもの。

たとえば、みにくい男のシタゴコロ。

いいと見せてあの娘の気をひこう。

その一心で、井戸を掘る男がいる。

そのシタゴコロは日常生活ではメイワ
クなだけだが、キャンプで井戸を掘れば、
現地の村人の役に立つ。

誰からも評価されなかつた人間。

その人間の悔しさが、大きなエネルギー
となつて、キャンプに打ち込まれる。

おそらく僚太郎は、リンホウに暮らす
人たちとの一年間のかかわりの中から、
大きな、そして大切なものを吸収し、そ
れを文章にして、日本にいる私たちに伝
えてくれるだろう。

日本ではカラのペットボトルだった彼
も、リンホウでの一年の活動で、社会の役
に立つ人間と評価され、帰ってくるのだら
う。

それはもはや私たちにとつて、ハンセ
ン病の問題にとつて、中国にとつて、フリー
スどころの騒ぎではない。

カラのペットボトルが、おそらくアル
マーニのスイツになつて帰ってくるのだら
う。

そんな彼を見て、私は切に思う。
こいつを何とか応援したい。

そしていろんな人に、

「こんなエネルギーをもつたやつがいる」
そつふれて回りたい。

そして、FWCのメンバーに彼のこ
とを知らせなければならぬ。

そんな義務感のようなものを感じる。

皆さま、原田僚太郎という大きなエネ
ルギーをもつた人間がひとり、中国の小
さな小さなハンセン病療養所に一年間行
く決心をしました。おそらく彼は、療養
所に暮らす人たちとの関わりを通して
大きなそして大切な仕事をして帰って
くるでしょう。そんな彼をなんとか応援し
たいと思います。どうかあたたかなカン
パをよろしくお願いします。

◎ 西尾雄志

◎ 郵便振替 □座番号 00170-2-565117

加入者名 FWC 関東委員会

◎ 郵便貯金 記号 10120 番号 62574261

□ 座名義 FWC 関東委員会

中国キャンプのための哲学

西尾雄志

2 ハンセン病問題におけるワークキャンプの定位

前回、ハンセン病がほかの病気とどう違うのかをみてきた。

その違いとは、ハンセン病は、病気が治ったあとも、病気がよくなるまでできないところだった。

盲腸の場合、屁がでたら病気がサヨナラである。

だが、ハンセン病の場合、盲腸の屁に相当するものがなかった。

これが問題だった。

そしてそれは医学的な問題ではなかった。その原因には、社会がもっている差別と偏見の問題があった。

そしてその根底に、私たち一人一人の心の問題があった。

そしてその解決主体は、医師でもなく、人権派弁護士でもなく、私たちひとりひとりでしかありえない、ということを見えてきた。

今回は、その解決主体が、どのような手段をもって問題に取り組むかを考えたい。

「あ、あのボクたちって、ホントに村の役に立ってるんですか？」

フィリピン、バングラ、ネパール。数々の国でワークキャンプを行い、多くのキャンパーと出会う中で、よく聞かれた疑問である。

「うーん、あんまり役に立ってないよね」

そう思った心をぐっぐぐとつぶやいて、「いや、楽しんで交流することもダイジだ

よ……」

起用にセメントをこねる村人を前に

きつちりとレンガを積み村人を横目に、

切実たる瞳の日本より来たりし青少年を

前に僕は、あいまいな笑みを浮かべて

そう答えていた。

「役立たず」

われわれキャンパーを表現する適切な

表現である。

セメントこねても、レンガ積んでも

井戸掘っても、ヘタクソなのである。

だってそんなこと、やったことないん

だもの。

今の日本でセメントをスコップでこね

る機会なんて皆無である。

今の日本で井戸を掘って、一体なんの

役に立つところなのか？

「世界のどこかでナンギしている人の役に

立ちたい」

その思いをもって、ワークキャンプに

参加する人は多い。

だが日本の社会で育ったわれわれは

なんとナンギしている人の役に立たない

ことが。

そのなジクジたる思いが、ずっと自分

の中にあつた。

「キミたちねえ、ボランティアもいっけ

ど、海外まで行くのにいくら飛行機代払っ

てるの？そのお金をユニセフにでも寄付

しなさい。その方がよっぽど、世のため

人のためなんだよ」

きわめてオトナの意見である。

だがこのオトナの意見に僕は、声を張

り上げて反論しなければならぬ。

9月に中国のハンセン病療養所のヤン

カン村を再訪した。

ヤンカン村は、去年の二月にワークキ

ャンプをした所だった。

キャンプでは、シャワールームを作っ

た。床と壁にタイルを貼った。

しかしキャンプ後の9月に行ってみる

と、床のタイルはかなりはがれていた。

タイルを貼るとき、セメントに水を入

れすぎたのが原因みだつた。

見た目はかなり、ムサンだった。

「日本の回復者の方々と一緒に、皆さんが

活動されているヤンカンを訪ねることに

なりそうです。皆さんの活動の成果を

実際に見てみるのが楽しみです」

とある大手の財団の方からメールを頂

いた。

「あっちゃあーあああ……」

パソコンのディスプレイに唾が飛んだ。

「いや、最近ヤンカンのあたりでは野生の

象がでてキケンらしいですよ。訪問地か

らはハズしたほうがいいですよ」

ワンの情報を流すつかとも考えた。

先生、母親との三者面談で、ヒドイ成

績がバレる直前の中学校のころを思い出

した。

「はがれたタイルは2月のキャンプできち

んと補修する予定ですよ……」

頼むからちゃんと直しててくれよ！

関西委員会*……（酒はっか飲ん

でないで、ちゃんと働けよ……）祈る

ような気持ちで、言い訳がましく返信し

た。

ヤンカンでのタイル貼りの作業に専門

の業者を雇い、作業をしてもらったら、

こんな問題など起きなかった。タイルな

んて剥がれなかった。

われわれのキャンプって一体……

重い気持ちになる。

この前、ハンセン病の問題は医学の問

題であると同時に、法律の問題であり、

社会の問題でもある、と書いた。

しかし中国の場合、さらに経済の問題

という要素が加わる。

経済成長著しい中国の影で、ハンセン

病の療養所は、経済的に貧しいところが

多い。

そこで必要になるのは、お金である。

モノを言うのはセゼである。

お金があれば、療養所の生活ぶりは向

上する。お金があれば、いいシャワール

ムができる。いい部屋ができる。いい台

所ができる。うまいもんが食える。セゼは

物的な豊かさを保証する。

しかし、ワークキャンプは、この経済

的な問題と同時に、社会的な問題も同時

に追及していくものでありたい。

ヘタクソながら汗を流して働く。療養

所の人は喜んでくれる。卵をくれる。バ

ナナをくれる。ニワトリを生きたままく

れる。

日本での生活の中でバナナなんても

らっても

「サルじゃねえんだよ！」

で終わりだが、自分たちが働いて、そ

れを見て人が感謝の気持ちとして、笑

顔でバナナをくれる、それはかけがえな

くうれしいものだ。

日本の生活でニワトリを生きたままも

らつても対処に困るが、キャンプ中だと

晩ご飯になる。ニワトリのお札に、キャ

ンパー用の食事を小皿にもつておすそ分

ける。そこからありふれた人と人との

関係が生まれてくる。

ワークキャンプは、このありふれた関

係をつくる場でありたいと思う。

社会の問題としてのハンセン病の側面

を、このありふれた人と人との関係の中

から、考えていきたいと思う。

ワークキャンプでは、どんなものを作っ

たかを大切にすると同時に、「どうやっ

て」作ったか、ということも大切にしたい。

何か作る中で、そこにどんな出会いがあ

り、どんな関係が生まれたか、それを大

切にしていきたい。そしてその活動を中

国の若者と一緒に行きたい。

それが、ハンセン病に残された最後の問

題である、差別と偏見に取り組むための、僕なりの方法論だ。

これが有効な方法かどうか、僕にはまだわからない。

だけど、ひとつの試みとしてやってみる価値はあると思う。

だから僕は、ユニセフに寄付なんかしないで、自分の無能さも省みず、バイトで稼いだ金をつぎ込んでワークキャンプに参加する。

盲腸の場合、病氣とサヨナラするために、屁が必要だ。

ハンセン病の問題も、病氣とサヨナラし、社会復帰するために、盲腸の屁にあたるものが必要だ。

お金を積むだけでは、いい建物を作ることは出来ても、「ハンセン病の屁」を作ることは出来ないと思う。

中国の若者と、日本の若者、そして療養所の人たちがお互いなりふりふれた関係、この中にこそ、「ハンセン病の屁」を作る写真が隠されていると信じている。

*1 言い訳がましく言うと、ヤンケン は関西委員会主催のキャンプでした（決して関東委員会ではないのです）。ただ、ぐに剥かれたタイル貼りの作業には、僕も参加してたんですけど…。

◎西尾雄志

関東委員会 会計より

年会費、カンパをたくさんの方々よりいただきました。ありがとうございます。

年会費

近藤剛史、君塚隆太、鈴木雅美

中国 キャンプカンパ

下郷晃、青山和実、君塚隆太、森田知代、木村聖哉、並里まさ子、宮本郁子、鈴木玲子、武藤綾子、丸山、服部雅行、笠原彦大藤公、原田健一、田中宇宙、南井弘次、柳川義雄、木村、前島夫人、藤沢夫人、矢部后代、久末栄子、川村雅子、藤澤真人、伊藤祥江、西村麻里、中元則子、西尾雄志、島倉陽子、松本モト、一人芝居残金、ほか飲み会でのカンパなど

カンパ

鈴木雅美
順不同、敬を省略させていただきました。
引き続き、年会費、中国ワークキャンプ、中国滞在員へのカンパを募集しています。どうぞよろしく願います。

FIWC 関東委員会の年会費

年会費は3000円です。振込みは以下のどちらかの口座をお願いします。
※領収証の発行を希望される方は、その旨お知らせください。

- ◎郵便振替 口座番号 00170-2-565117
加入者名：FIWC 関東委員会
- ◎郵便貯金 記号 10120 番号 62574261
口座名義：FIWC 関東委員会

森元美代治 中国 キャンプ 参加 記念 講演会、FIWC 関東委員会 年度末 報告会 のお知らせ

3/22 (土)

森元美代治さんが中国のハンセン病療養所リンホウ園のワークキャンプに参加されることを記念して、下記の日程で記念報告会を行います。報告会後には、別会場で夕食会を催します。この夕食会では、FIWCの現役メンバーが夕食をご用意いたします。頂く参加費から生まれる黒字分は、リンホウ園のワーク費用、現地駐在員の派遣費用にあてられます。ふるってご参加ください。

日時：3月22日午後3時報告会開始
(夕食会は6時より開始)

場所：記念講演会(午後3時スタート) 早稲田大学本部キャンパス内の教室
(現在講演会会場の手配が遅れています。参加ご希望の方はご面倒ですが会場確認を、下記の担当者まで、メール、もしくは電話にてお問い合わせください)

夕食会(午後6時スタート) 早稲田奉仕園6号館1階
注) 記念講演会と夕食会は会場が異なります(歩いて数分の距離)。
夕食会参加費：6000円(含夕食代)
*お酒、飲み物類の持込を歓迎いたします。

*ご宿泊をご希望される方は、別途3000円程度の追加料金で宿泊も早稲田奉仕園内で宿泊も可能です。希望される方は、担当(西尾)まで事前にご連絡ください。
*夕食会では菊谷さんが呼びかけ人となり、OBの方も多数参加されます。当時のキャンプ中の写真など、当時の様子のばれるものをご持参ください。

◎西尾雄志

定例委員会報告
2003年1月号
2003年2月16日発行
フレンズ国際労働キャンプ(FIWC) 関東委員会
委員長 西尾雄志

編集：茂木亮(茂木新聞社)
web@mognet.org

発送作業参加者
原田僚太郎、藤澤真人、柘田香織、西尾雄志、茂木亮

※PDF版には個人の連絡先を掲載しておりません。必要な場合は次のメールアドレスまでメールにてお問い合わせください。
web@mognet.org

モグネット

www.mognet.org



モグネットリニューアル!!

- 並里まさ子医師(栗生楽泉園副園長)によるモロッコなど海外のハンセン病の歴史と現状
- 韓国や中国などアジアのハンセン病の資料、写真も豊富!
- ハンセン病関連書籍の検索ができるようになりました。もちろん書籍の購入もできます!
- ワークキャンプのお知らせ、感想文、ほか
- 4月下旬から、中国駐在員・原田僚太郎のレポートが連載開始予定。乞うご期待!!

モグネットの記事を書いてみませんか?

- ワークキャンプの感想文・記録・意見・写真
- ハンセン病問題の資料、論文、レポート
- 各種イベント情報 などなど